

研究タイトル：

書物の〈装い〉研究の方法と実践



氏名： 常木 佳奈 / TSUNEKI Kana E-mail: tsuneki@kurume-nct.ac.jp

職名： 准教授 学位： 修士（文学）

所属学会・協会： 日本出版学会，日本近代文学会

キーワード： 出版文化，木版多色摺口絵，デジタルアーカイブ

技術相談： ・文化資源のデジタルアーカイブ構築

提供可能技術：

研究内容： 書物の〈装い〉研究の方法と実践：明治期木版多色摺口絵を事例に

従来、近代文学研究の周辺では、書物の〈装い〉について語ることを「マニアたちのフェティッシュ」*1とみなす傾向にあったが、ここ数年、関連の学会において「デザインや装幀などの実践の側からの知見も取り込みつつ、書物の関係性の中で見える、テキストや文学の受容のあり様」*2を検討するという、新たな方向性がみられるようになってきた。このような背景を踏まえ、本研究は、近代期の書物を取り巻く視覚的要素（口絵や挿絵、表紙絵など）を、同時代の出版・読書文化にアプローチできる資源として位置づけ、人文学研究の俎上に載せることを試みる。なお、本研究の目的を達成するための調査対象としては、木版口絵を選定した。

明治20年代中頃から末期にかけて刊行された書物、とりわけ小説を掲載した雑誌や単行本には、江戸時代に発展した錦絵を彷彿させるような、美しい木版多色摺の口絵（以下、近代木版口絵）が付されていることが多い。これら口絵は、同時代の出版・読書文化を窺い知ることができる貴重な資源であるにもかかわらず、その形態的特徴から〈扱いにくい〉ものとみなされ、美術や文学の分野から敬遠され続けている。しかし、近年、契機は定かでないが、国内外の美術館などにおいて近代木版口絵にクローズアップした展示会が次々と開催されるようになった。このことから、近代木版口絵が、今、世界から最も注目を集めている日本の文化資源の一つであることは明白であり、研究の進展を急がねばならない状況にあるといえよう。

以上を踏まえ、本研究では、以下の二つの視点から調査を進めている。

- 1) 近代木版口絵のデジタル研究環境基盤整備： いまだ黎明期にあるともいえる近代木版口絵研究の環境を整備すべく、国内外の美術館や図書館、個人が所蔵するコレクションについて資料のデジタル撮影を実施し、デジタルアーカイブを構築している。当該データベースは、立命館大学アート・リサーチセンターのシステムを通して公開中。
 （「口絵ポータルデータベース」https://www.dh-jac.net/db/nishikie/search_kuchie.php）
- 2) 1を用いた出版文化研究の試み： 1の研究活動によって構築されたデータベースをもとに、デジタルヒューマニティーズの視点から明治期の出版文化について考察している。具体的には、デジタル化された資源をベースに同一絵柄の口絵について版の検討を行い、「文芸倶楽部」（博文館）のように限られた出版スケジュールのなかで大量の木版口絵を用意する必要がある場合、複数の主版が制作された事実などを明らかにした。

*1 山中剛史「谷崎本書誌の余白に（1）：『谷崎潤一郎先生著書総目録』追補のために」（日本古書通信 81（5）, pp.4-6, 2016）

*2 日本近代文学会運営委員会「秋季大会発表要旨 特集 書物としての近代文学【特集の趣旨】」（「会報」（131）, p.5, 2019）

提供可能な設備・機器：

名称・型番（メーカー）

名称・型番（メーカー）	